

勘違いは止まらない！

ふに・ふらふら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死後の誉れ（大人のビデオの証拠隠滅）の為に善行を積み重ねなければならない。

今生17歳の誕生日までにおよそ100万ポイント。

ポイント獲得の明確な基準も不明なまま、男は青春を駆け抜ける。

全てはむつつりスケベの為に。

神よ、善行を受け取り給え。

生徒会は友情を深めたい！

目次

スタート	1
四宮と白銀は誘いたい(表)	5
四宮と白銀は誘いたい(裏)	13
かぐや様は恋話がしたい(表)	21
かぐや様は恋話がしたい(裏)	29
生徒会は一緒に食べたい(表)	39
生徒会は一緒に食べたい(裏)	47
田沼翼は告白したい(表)	53
田沼翼は告白したい(裏)	63
所場十八は隙あらば語りたい(表)	71
所場十八は隙あらば語りたい(裏)	

白銀御行は踏み込みたい	80
所場十八は胃が痛い	102

スタート

神は言った。

死後の誉が欲しければ、善行を積めど。

正しき者には報いがあるのだと。

死ぬ寸前に見ていた大人のビデオの証拠隠滅は、善行およそ100万ポイントで叶う。

むつつりスケベで表向き誠実な私はその甘言に頷くしかなかった。

新たな人生も早16年と少し。

異世界でも何でも同じ日本に生まれ、両親はいないものの祖父母のお陰で特に不自由のない生活が送れている。

毎月の生活費をあの手この手で増やして寄付してはポイント獲得の日々。

身近でできる善行はなんでもやった。

そうして貯めたポイントは現在810000。809000と811000の間の数。偶数であり、自然数。特に深い意味はない。

右腕に刻印されたその数字。

ちよつと中二病ぼくつて包帯で怪我した風にしたらもつと中二病ぼくなつたそれ。人生のほとんどをポイントに捧げてやつとここまでできた。

私には時間がない。

神曰く、タイムリミットは17歳の誕生日。今年の9月1日。後数ヶ月しかない。

それまでに100万ポイント貯めないでジ・エンド。

ギリギリいけるかどうかの微妙な所。気を休める暇なんてない。

朝の身支度の為、鏡と向かい合う。

以前と容姿が似ているのは神の思惑か。成長するにつれ、その顔は慣れ親しんだものへと近づいている。

以前の私はむつつりスケベで誰にでも優しくしていたからなのか知らないが、よくホモと間違えられた。

なんなら男の部下に告白された事もある。

だが！そんな事はもうどうでもいい。

ホモだと思われようとも、今の私は全てを優しさに捧げる。

全てはポイントのために……!

葬式で笑われたくない。慕われていた部下、頼りにしてくれていた上司、そして何より親族が心の中で吹き出している葬式は嫌だっ!泣く!

“あの部署の人、イキ氏にしたって……w”

“昇天するのに人妻ものは笑える”

“息子が息子握ったままいきよった”

なんて言われたくない……!

違うんだよ、その日はたまたま隣室の人妻とエレベーターで談笑して。ちよつと興奮しちやっただけで、決して最期のイク瞬間にそれを選んだわけじゃなくて。

ピピッ

腕時計のタイマーが午前4時を知らせてくれる。

「今日も一日がんばるぞい!」

町内の清掃から始まり、掲示板に張り出されていた迷い子の子猫の搜索。e t c, e t c……。その後は学校の清掃と生徒会の仕事を片付けなければいけない。

いつも通りの日常。されどやる事は山積みだ。

我らが秀知院学園高等部生徒会の一員として身嗜みにも気をつけなければいけな

い。

「では、行ってきます」

誰もいない部屋に頭を下げて、私は家を出た。

生徒会学校長特別推薦枠・役職名・雑用。
場所ところはは とうよう
十八

四宮と白銀は誘いたい（表）

人を好きになり、告白して結ばれる。

それはとても素晴らしい事だと誰もが言う。

だがそれは間違いである！

恋人たちの間にも明確な力関係が存在する！

搾取する側とされる側。

尽くされる側と尽くす側。

勝者と敗者。

もし貴殿が気高く生きようと思うのなら決して敗者になってはならない！

恋愛は戦！！

好きになった方が負けなのである。

side主人公

私立秀知院学園。

かつて貴族や士族を教育する機関として設立された由緒正しい名門校である。

貴族制が廃止された今でなお富豪名家に生まれ、将来国を背負うであろう人材が多く修学している。

そんな彼らを率い纏めあげる者が凡人であるなど許されるはずもない。

全てに秀でたマジモンの天才、しのみや四宮かぐや。

努力の鬼、秀才の白銀御行。しろがねみゆき

キャラの濃いやつらばっかのこの学園。そんな学園の一室。生徒会室で息を潜めながら仕事をこなす私。

それはなぜか。

「なんだか、また噂されているみたいですね。私達が交際してるとか」

そう言って会長に紅茶を淹れる副会長。

中等部の頃、何故か話しかけるだけでポイントが入る四宮かぐやに付き纏っていたらすっかり嫌われてしまった私。

息を潜め、いないものとして扱ってくださいアピールをする。

善行にはポイントが与えられる一方、他者に不快感を与える行い等にはポイントにマイナスがつく。明確なポイント付与の基準が数年かけても分からなかった以上、不用意

な行動は慎むべし。

この生徒会では、何気ない一言でポイントが減る場合がある。きっと私は生徒会メンバーに嫌われているのだろう。

一応ポイント獲得だけに注視すればデメリットよりメリットの方が大きいから所属しているが、正直生徒会の仕事なんかも全て家でやりたい。

けど定期的に顔を出さないとそれもポイント減に繋がる。

嫌われてんじやないのかよっ。

もうわけわかめ。

「そういう年頃なのだろう。」

聞き流せばいい」

白銀御行。

私を嫌っているであろう生徒会のトップ。

ただし、いい奴である。

家計が色々と厳しいらしく、定期的に物を与えればポイントが手に入る。

ポイント製造マシン。

私が嫌いな割に感謝はしてくれるのでいい奴。

ただし、余計なことを言うとなまにポイントが減るので注意。

「ふふ、そういうものですか」

「はは、そういうものだ」

長い沈黙の後、静かに笑い出す二人。

ついにテレパシーで会話しだしたのだろうか、この二人。

仲良さげで大変羨ましくうごぎいますよ、まったく。

「そういうえば今日、庭の噴水にある甘いリングとさくらんぼのレリーの奥深くにカタツムリが——」

「俺の妹が昔、暑いからと言って噴水に入って風邪を引いてな。ほんと、感情で動くところくなこと——」

雑談する二人、羨ましい。

だが私は空気だ。

「ああ、そういうえばー。聞いてください。なんか、映画のチケットが当たったんですけど家の方針でこういうものを見るのは禁止されてましてー。」

お二人はご興味おありですか？」

取り出したるは三枚の映画チケット。

バックに華を咲かせる頭ポワポワの藤原千花ふじわらちか

こいつに関わって何度ポイントを減らされたことか。だが、許す。可愛いから。

地雷原書記。彼女に減らされた分をポイント製造マシン白銀で回復するのがルーティンになっている。

基本関わらないが吉。

「ほう、そういえば週末は珍しくオフだったな。だったら四宮、俺たちー

「なんでも、この映画を男女で見に行くと結ばれるジंकクスがあるとか!」

「っ!?!」

「ステキ!!」

可愛らしく左右に揺れながらそう言う藤原を他所に白銀と四宮はお互い睨み合っている。

なんだ、またテレパシーか？

「…ん。あら、会長。今私の事を誘いましたか？

男女で見に行くとは結ばれる映画に、私と会長の男女で行きたいと。

あらあら、まあまあ。それはまるで……」

頬を釣り上げる四宮に対して白銀もまた笑みを浮かべる。

「ああ、四宮を誘った。俺はそう言った噂など気にせんが、お前はそうではないみたいだな。

「お前は俺とこの映画を観に行きたいのか？」

「そうですね。やはりどうしてもこう言ったお話は信じてしまうもので。ですから、私達――

「もう！お二人とも何を言ってるんですか。チケットは三枚あるんですからもう一人お誘いすればいいじゃないですかー！」

二人の意味深なやり取りを藤原が可愛らしく遮る。可愛い。

けど、今のやり取りってようは二人で行きたいって事じゃないの？

でも、誘うとしたら石上君かな。彼が二人に誘われてあたふたしてるところ見てみたい。なにそれ愉悦。

あ、間違えてパソコンに愉悦って打っちゃった。

……予測変換に愉悦部って出てきた。

「そうですね。せっかくチケットが三枚あるのですから、三人で行くのがいいでしょう。思い当たる方はいらっしやいませんか、会長？」

「……そ、うだな。俺と四宮にもう一人加わるのならば、共通の知人が――

「あ！圭ちゃんがいるじゃないですかー！かぐやさんも会長の妹さんに会ったことありませんし、いい機会なのでは？」

しろがねけい
白銀圭

白銀御行の妹さん。ポイント稼ぎに白銀のお宅にお邪魔した時に会ったが、あの娘も御多分に洩れず私を嫌っている様子。

初対面時に鼻で笑われたのはいい思い出。

とりあえずこちらの仕事も一段落したところで、話のオチもつきそうなので一足先に教室に戻ろう。

もうすぐ昼休みも終わる。

「それではお三方。」

私は先に教室に戻ります。また放課後に

余計なことを言わないよう言葉に気をつけ、一礼する。

「え、ええ。そうですか。ではまた放課後に」

私が話しかけた瞬間苦笑いになるのやめてもらっていいですか四宮さん。

さつきまでの笑顔どこいった。

「ああ、また放課後にな、放課後に」

放課後強調して、そんなに顔合わせるのが嫌かこのやろう。なら今日は家で仕事しても問題ないよね、ね？

「あ、居たんですね。十八とっやうさん」

はい、居ました。藤原さん。

私が顔を向けると目をそらすのなんなんですか。私は汚物か何かですか。私が生徒会室を出ると再び話し声が戻る。その声音に先程の硬さはない。私、嫌われすぎじゃね？

またあれか、ホモだと思われてんのか？

ん？アルエエ？ポイント減ってるう？

何でえ？

四宮と白銀は誘いたい（裏）

友達。

勤務、学校あるいは志などを共にして、同等の相手として交わっている人。友人。その言葉に従うならば、秀知院学園高等部生徒会メンバーは全員が友達と言うべき間柄といえよう。

生徒会という組織に所属し、同じ志の元に勤め、役職はあれど立場は対等である彼ら。だがそれは、あくまで言葉の上でのこと。

今期生徒会として過ごして早半年。

白銀達が未だ仲を深められぬ存在がただ一人存在した。

彼の名は所場としろはばとうじょう十八

生徒会特別枠の雑用である。

曰く。感情の起伏が少ないながらもその行動は善意に溢れ、この学園の誰もが彼に助けられた経験を持つという。

曰く。その中性的な容姿から男女共に人気ながらも、その純白さは性欲モンスターに

劣情すら抱かせず身を引かせるほどであると。

曰く。激務である生徒会に助力したいという想いから、校長に直談判し自ら生徒会雑用枠に収まったという。

曰く、曰く、曰く。

彼の話、噂話も含めれば数え切れないほどにこの学園では溢れている。

だが、そんな彼の素性を知る者はほとんどいない。

日本有数の富豪の子息であるという噂も一時期出回ったが、所場ところばという該当する氏がないためあやふやなままその噂も立ち消えた。

その超然とした振る舞いから周囲が一步退いているため彼の真実を追求する者も少ない。

だが、生徒会メンバーが彼と仲を深められないのは別の要因も存在した。

それは、彼自身の周囲と一線を引いた人付き合い。

生徒会で半年過ごして、未だ呼び方が白銀さんである生徒会のトップ。

白銀御行は思った。

“マジで仲を深められる気がしない!!?”

それは副会長である四宮かぐやも同じ想いであった。

“中等部の頃より距離感が遠くなってるじゃない!!? なんで?!”

思いがけないところで通じ合った二人は共同戦線を張り、所場十八ところばとうようと仲を深めるべく様々な策を弄する。

生徒会は友情を深めたい！

side 白銀御行

四宮と共同戦線を張ってこれまでいくつか策を講じてはいるが、いまいち結果に繋がらない今日この頃。

今日も今日とて十八とうようを映画に誘うべく四宮と共に戦いに臨む。

「なんだか、また噂されているみたいですね。私達が交際してるとか」

四宮の裏工作により藤原書記が現在所有する三枚の恋愛映画チケット。

その遠回しの話し出しとしては上々だ、四宮。

「そういう年頃なのだろう。」

聞き流せばいい」

話に乗ってくるか、藤原書記？

「ふふ。そういうものですか」

「はは、そういうものだ」

乗ってこないのかッ!!

「そういえば今日、庭の噴水にある甘いリンゴとさくらんぼのレリーフの奥深くにカタツムリが——」

時間稼ぎに四宮が雑談を挟んできたが……。

チラツ

大福に夢中か、藤原!!

四宮がしちやいけない目でお前を見てるぞ！気付けッ!!

「俺の妹が昔、暑いからと言って噴水に入って風邪を引いてな。ほんと、感情で動くところくなことに——」

「ああ、そういえばー。聞いてください。なんか、映画のチケットが当たったんですけど家の方針でこういうものを見るのは禁止されてましてー。」

お二人はご興味ありますか？

やっとか!

「ほう、そういえば週末は珍しくオフだったな。だったら四宮、俺たちー」

「なんでも、この映画を男女で見に行くと結ばれるジンクスがあるとか!」

「っ!?!」

なん、だどっ……。

「ステキ!!」

「なんだそのジंकクス!? 計画にはなかっただろ! 四宮お前ツ!? (アイコンタクトである)」

「し、知らないわ!! 私は早坂にオススメの映画を頼んだだけで、内容なんて知らないもの! (テレパシーではない)」

あのまま行けば自然な形で十八を誘えたのに。ここで無理に誘ってしまえば、俺がどうしても十八と行きたいみたいになる。いや事実そうなのだがそれが十八にバレるのは、なんか、こう……恥ずかしい。

ここは誘導して四宮から十八を誘う形にすれば……。

「…ん。あら、会長。今私の事を誘いましたか?」

男女で見に行くとは結ばれる映画に、私と会長の男女で行きたいと。

あらあら、まあまあ。それはまるで……」

まるで告白のようではないかツ!!

四宮、お前!!

俺に誘わせるつもりだなッ!

ここで十八を誘えば俺が四宮にそういつた感情がないことは証明できる。

だが、それでは元の木阿弥。

ならば……！

「ああ、四宮を誘った。俺はそう言った噂など気にせんが、お前はそうではないみたいだな。」

お前は俺とこの映画を観に行きたいのか？

さあ、これでお前も俺と同じ土俵だ!! 誘うも地獄誘わぬも地獄。

「そうですね。やはりどうしてもこう言ったお話は信じてしまうもので。ですから、私達——

「もう！お二人とも何を言ってるんですか。チケットは三枚あるんですからもう一人お誘いすればいいじゃないですかー！」

「……………」

お前がジंकクス云々言ったんだろうがッ!!

だが、これでまた十八を誘いやすい流れができた。

「そうですね。せっかくチケットが三枚あるのですから、三人で行くのがいいでしょう。思い当たる方はいらっしやいませんか、会長？」

この期に及んでまだ俺に誘わせようとするか、四宮。

だが、藤原がアシストしたこの流れならより自然に、みんなで話し合った結果それがいいよねー的な、そうなるのが自然だよねー的な感じで言える！

仕方ない。今回は俺が譲歩してやる。次回はお前が誘え。

「……そ、うだな。俺と四宮にもう一人加わるのならば、共通の知人がー

「あー圭ちゃんがいるじゃないですかー！かぐやさんも会長の妹さんに会ったことありませんし、いい機会なのでは？」

また、お前か藤原ッ
!!!!

ガタツ

部屋の隅でパソコンをいじっていた十八が立ち上がった。

まさか……。

「それではお三方。

私は先に教室に戻ります。また放課後に」

「(終わっ……た)」

「え、ええ。そうですか。ではまた放課後に」

四宮が引き攣った笑顔を浮かべる寸前、藤原をすごい目で見ていた事に俺は気づいていた。

……一応後でフォローしておこう。

「ああ、また放課後にな、放課後に」

放課後に会った時に話す話題も考えておかなければ。

「あ、居たんですね。十八さん」

それにしても結局今回も上手くいかなかったか。

はあ……。

『本日の勝敗、白銀と四宮の負け。』

「藤原さん、少し宜しいでしょうか？」

「ん？何です、かぐやさん？」

さて、どうやって四宮を止めよう。

かぐや様は恋話がしたい（表）

side主人公

「ラブレター!?」

「ええ。とても情熱的な内容で一度食事でもどうかと」

ラブレター。

生前貰ったラブレターでは体育館裏に呼び出され、そこには漢達が待ち構えていて……柔道部、柔道部、野球部、バレー部……。

「ええ!? つまりデートのお誘いという事ですか！

……デートするつもりなんですか？」

四宮とデート。

ポイントの減りが想像つかね。

「もちろんです。

勇気を振り絞ってこんな情熱的な恋文をくれる方です。きっと好きになってしまいうに違いありません」

むつつりスケベ時代ならそんなセリフに頭の片隅でピンクな想像が出来たものを……。

今では並列思考が全て雑務処理に使われてしまっている。

まったく衰えたものだな、私も。

むつつりの名が泣く。

「かぐやさん、ほんとに行っちゃうんですか？」

「ええ。とても楽しみですわ」

「四宮。生徒会長として不純異性交遊は推奨できないぞ」

デートⅡ不純異性交遊。

ああ、これはむつつりですね（偏見）。

「大げさな。」

食事に行くだけですよ」

「判断するのは教師だ。」

停学処分ということも十分ありうる」

あはは、ご冗談を会長。

それだけで停学処分って。

ポイント幾ら減るんだろうか。1万単位？いや、不特定多数の悪感情はもつと行く可

能性も……ひええエ。

「どうしても行くというのなら、そうだな…。」

俺から教師に話を通しておいてやろう」

「ええ!!？」

……この学園。

前々からお堅いとは思っていたけれど、まさかそこまでとは。

日本の未来を背負う子供たち。上層階級は案外乱れてないのか。安心した。金にものを言わせて生娘をみたいな前時代的思考がまだ蔓延ってるのかと思つてたよ。

お代官様、あく〜的なあれね。

「構いません。それが真実の恋ならば私は退学だろうと受け入れるつもりです」

「た、退学……」

「真実の恋ならば身も心も捧げる覚悟はあります」

ミモココロモ？

四宮を傷物にしたら氏ぬ。相手が社会的に氏ぬ。

「馬鹿な事を!？」

「馬鹿じゃありません！熱烈な愛を伝えてきている人です。退学も覚悟で応えなくては、不義理ではないですか！」

重い。

学生の恋愛じゃないぞ、コレ。

ラブレター出すくらい行動力に溢れてる奴なんてどうせ陽キャだよ？相手にそんな覚悟ないって。頭お花畑だって絶対。

「……だが、当事者の心の内がどうであれ生徒会たるもの常に周囲からどう見られるかを考えなければならない。

現副会長である四宮の行動はそのまま我々生徒会の評価にも直結する。それとも四宮は己の都合でその他を蔑ろにするほどの愛があると。

そういう覚悟がある！そう言うのだな!!」

四宮の行動で生徒会の評判が落ちた場合、ポイントに影響するのかな……。

いや、わっかんね。

「でしたら会長は体裁の前には真実の愛など崩れ去ってしまうと言うのですか!!多勢に屈してしまうような会長であると!!」

四宮どんだけデート行きたいのお？

そういう年頃ですか、興味津々ですか。

え、可愛い。

「そういう事ではない！」

時に愛よりも優先すべきものがあると言っているだけだ！」
「でしたら聞いてみましょう。」

藤原さんと所場さんはどう思われますか？」

え、ここで話振るの？

むつつりは全ての女性を愛しています（確信）。

例えどんな女性だろうとそこに可愛さを見出さなければならぬとルールブックに載っているはずです。

だが、体裁のためにポイントに屈した私はむつつりの敗北者じゃけエ。

「わ、私は愛に勝るものはないと思います！けどお、かぐやさんにデートに行つて欲しくありません。うううえーんかぐやさん行かないでください！！退学なんて嫌だあ！！うわあーん！！やだやだ！！居なくなつちやわないでえ！！」

百合……。

いい。そういうジャンルも好きです。

けれどこれは、私の解答はお流れで宜しいのか。

「えつと、んんッ。」

あゝ、所場はどう思う？」

よくないよね。みんなこっち見てます。

なんて、……言えばいい。

どうすればポイントが減らないのか。体裁を選べば白銀には好印象か？けど、それだと四宮と藤原の心象が最悪。

1人よりは2人。私は愛を選ぶぞ、白銀エ!!ごめん!

「……白銀さんは我々生徒会を想つてのお考えでしょうし、四宮さんもお相手を想つてのこと。」

どちらも愛に溢れた素晴らしいものです。どちらに優劣もつけられません。

愛とはそういうものですか」

そういうものですか（真顔）。

これを言ったのは私じゃない（現実逃避）。

少し頬が熱いが気のせいという事しておく。

けど、これならどちらにも悪印象を抱かれない……はず。結局逃げの解答だが許せ。

……あ、ポイントが少し入った。ふう。

「……え、あ、もしかして所場は慕っている相手がいるのか？」

「エエエ!!? そうなんですか、十八さんッ!?!」

「そうなの!?!」

いやなんでそうなる。

それに何その迫真の疑問顔。彼女いない私が愛を語ってはダメですか？彼女なんていませんよ。ルールブックにも（以下略）

「いえ、お慕いしている方はおりません。これまで何度か恋文（漢）をいただいたこともありますが、丁重にお断りしております」

「え、なんで……？」

なんでつて相手漢だからなあ。

もしこつちの世界で女の子に告白されても、どうせあと数ヶ月でこの学校ともおさらば。

ポイント貯めきつたら一般的な高校に転校して余生はむつつりと過ごすんだ。間違えた。ゆつくりと過ごすんだ。

この学校は問題が多すぎるとです。ポイントとしてはありがたいけど。

やはりむつつりこそ至高だった。見てるだけで幸福が得られる。なんて害のない生物なのでしょう。

むつつり教万歳。

「どうせ叶わぬ恋（相手視点）。終わりが確定している想い（17歳でこの学校とおさらば）なら最初から応えない方が良いでしょう？」

私と共にあれば不幸になる。私はそれを望みません（ポイントを減らしたくない）」

……おい、今ポイントが100くらい減ったんだが!!

何デエ！何がいけなかったの!?

と、とりあえずこのままここにいるのはやばい、これ以上何か言えば今日稼いだポイント分どころか一週間分が消える!!

「……仕事も今日分は終わりましたので（嘘）、私はこれで失礼します。

では、また明日」

身支度を整えて足早に生徒会室を去る。とりあえず、家で生徒会の残りの仕事を片付けて今日減った分のポイントを補填しよう。

善行善行、レッツ善行！

かぐや様は恋話がしたい（裏）

side 四宮かぐや

「ラブレター!？」

「ええ。とても情熱的な内容で一度食事でもどうかと」

ラブレター。

差出人への興味は虫ケラにも値しませんが、ここは話題提供に使わせていただきましょう。その流れで場所さんの恋話が聞ければ上々。

「ええ!?! つまりデートのお誘いという事ですか!」

……デート、するつもりなんですか?」

色恋の話題には必ず食い付く藤原さんが居てくれるのも好都合。

「もちろんです。」

勇気を振り絞ってこんな情熱的な恋文をくれる方です。きっと好きになってしまいうに違いありません」

それに、会長なら私の思惑にも気付くはずですし。

「かぐやさん、ほんとに行っちゃうんですか？」

「ええ。とても楽しみですわ」

行くわけないでしょう、藤原さん。

この娘脳に花湧いてるのかしら。この私をデートに誘いたいなら国の一つでも差出して初めて検討に値するのよ。誰が好き好んで慈善活動なんてするもんですか。

「四宮。生徒会長として不純異性交遊は推奨できないぞ」

乗ってきた！ここから自然な形で所場さんへ話題を移行しなくてはいけない。

まずは会長との数回のラリーを経て、恋話への流れを掴む！！

「大げさな。」

食事に行くだけですよ」

「判断するのは教師だ。」

停学処分ということも十分ありうる」

…？私の思惑としては恋の経験の有無について話を膨らませ、藤原さんを巻き込んだ話題転換をしていくつもりでしたが、会長はどんな意図でそのような事を？

「どうしても行くというのなら、そうだな…。」

俺から教師に話を通しておいてやろう」

「ええ!!？」

なるほどそういう事ですか。そうですね、会長の策に乗って差し上げます。手順を間違えたら許しませんよ？

「構いません。それが真実の恋ならば私は退学だろうと受け入れるつもりです」

「た、退学……」

「真実の恋ならば身も心も捧げる覚悟があります」

「(身も心も!) 馬鹿な事を!」

何故ちよつと本気で答えているのですか。あくまで演技ですよ。私が有象無象の雑草に気を許すはず無いではありませんか。

「馬鹿じゃありません! 熱烈な愛を伝えてきている人です。退学も覚悟で応えなくては、不義理ではないですか!」

「ここまですれば話題をずらせる。さあ、会長! 今です!」

「……だが、当事者の心の内がどうであれ生徒会たるもの常に周囲からどう見られるかを考えなければならぬ。」

現副会長である四宮の行動はそのまま我々生徒会の評価にも直結する。それとも四宮は己の都合でその他を蔑ろにするほどの愛があると。

それほどの覚悟がある! そう言うのだな!!」

きた! これでラブレター云々ではなく、愛という話題にすり替わる。蔑ろにするとい

うのは少し言い過ぎですが、この際いいでしょう!

「でしたら会長は体裁の前には真実の愛など崩れ去ってしまうと言うのですか!!多勢に屈してしまうような会長であると!!」

「そういう事ではない!

時に愛よりも優先すべきものがあると言っているだけだ!」

「でしたら聞いてみましょう。」

藤原さんと所場さんはどう思われますか?」

議論が高まった際、周りの意見を求めるのはよくある流れ。そして、藤原さんの名を先にあげることです。所場さんへの話題の振りを少しばかり和らげてくれる。

それにこの空気なら、拒否しづらはず!

「わ、私は愛に勝るものはないと思います!けどお、かぐやさんにデートに行つて欲しくありません。うううえーんかぐやさん行かないでください!!退学なんて嫌だあ!!うわあーん!!やだやだ!!居なくなつちやわないでえ!!」

ちよ、ちよつと藤原さん!?!デートに行く行かないの話題に戻したら折角ここまで進めた流れが台無しではありませんか!

また、この娘は私の邪魔をして……!!

気持ち嬉しいですけど、今はどうか黙っていてください!

「えっと、んんッ。

あゝ、所場はどう思う?」

流石です、会長!!

藤原さんも所場さんの話なら無視できないはず!

タイピングの手を止めてこちらを向く所場さん。その所作の全てに気品が溢れている。幼き頃から仕込まれている事は想像に難く無い。

所場十八の素性は四宮家の力を使っても不明。

けれど、それはおかしい。この学園に入学が認められている時点で何かしら表だった情報があつて然るべき。

それがほとんどない。

つまり四宮家以上の力を持った存在がその隠蔽に関わっているのは必然。

そのような家、一つしかない。

薄々分かつてはいた事ですが――。

「……白銀さんは我々生徒会を想つてのお考えでしょうし、四宮さんもお相手を想つてのこと。

どちらも愛に溢れた素晴らしいものです。どちらに優劣もつけられません。

愛とはそういうものですから」

所場十八は無表情である。けれど決して感情が表に出ないわけではない。

現に今その頬を僅かに赤く染めている。

と、いうか……その言葉で頬を染めるって、つまり彼——。

「……え、あ、もしかして所場は慕っている相手がいるのか？」

「エエエ!!? そうなんですか、十八さんツ!？」

「そうなの!？」

へ? あ、あああの一部生徒に大天使所場様と呼ばれるあの所場さんにす、好きな人が

……そんな、まさか!？」

「いえ、お慕いしている方はおりません。これまで何度か恋文をいただいたこともあり

ますが、丁重にお断りしております」

ですよねー。

「え、なんで……?？」

「どうせ叶わぬ恋。終わりが確定している想いなら最初から応えない方が良いでしょう

?

私と共にあれば不幸になる。私はそれを望みません」

その言葉の意味を私は理解できない。

当然の事。

私は彼の事を何も知らないのだから。

「……仕事も今日分は終わりましたので、私はこれで失礼します。

では、また明日」

その表情は諦め、それと落胆。私達の視線を切るように身を翻して所場さんは生徒会室を出て行った。

「……………十八さん、すごく悲しそうでした。それに、不幸にしてしまうって……………どうい
う意味でしょう?」

藤原さんの疑問はもつとも。

叶わぬ恋……………終わりが確定している……………不幸になる。

彼の事です。きっとそれも誰かを想ったこと。ならばそれはただならぬ事情。

想いが終わる、確定、相手が不幸。それはつまり……………何かしらの事情で相手の前から
いなくなるということ?」

それって……………。

「……………四宮」

「はい、何でしょう?」

分かっていきます、会長。

「どうやら俺たちに何かを躊躇う余裕などなかったようだ」

「そのようです」

「ここからは本気で取り掛かるぞ。恥も外聞も関係ない。あいつが何を抱えているのか、今の俺たちでは聞いても答えてはくれないだろう。

それ故に、早急に仲を深める必要がある。俺はあいつの力になりたい。

協力してくれるか？」

「ええ、もちろん」

「私も協力します！」

彼には借りがある。

彼はそんな事気にも止めていないのでしよう。見返りを求めない彼の優しさは誰も彼もを救ってしまう。

そうして色々と背負いこむ彼を私は知っている。

私はそんな彼を見て――。

私にはできなくとも、会長なら……。彼と同じ優しさを持つ貴方ならきつと所場さんに手を差し伸べる事ができる。

私には助力が限界。

きっとこんな私の手なんて、彼は握り返してはくれない。

—— 3年前 ——

「お早う御座います。 四宮さん」

今よりも少しばかり声音が明るい所場さん。

あの日初めて彼から声をかけられた。

「……………」

「今日も良いお天気ですね。 先日は疲労で倒れていた所を起こしていただきありがとうございます。」

「四宮さんは近頃はどうですか？」

「……………」

「お昼を一緒にどうでしょう？ 今日には私も昼食を持ってきましたので」

「……………」

思い返すとあの頃の彼は今よりも口数が多かった。

私がどんなに酷い扱いをしようとも何も変わらずに話しかけてきた。

彼の最初の印象は軽薄な男。何か裏があるのか。普段から誰彼構わず優しさを振りまく彼が、私はどうしようもなく気持ち悪かった。

理解できず恐ろしく、怖かった。

それでも拒めずにいたのは心の片隅で彼への興味があつたからなのか。

きつかけは何だったのでしょうか。

彼が私に話しかけなくなつたのは。

私は優しい彼すら嫌気がさしてしまうような人間だったのでしようか。

生徒会は一緒に食べたい（表）

side主人公

生徒会・昼

もはや定住スペースになった部屋の隅にて雑務を片付ける私。

ああ、感じる！ポイントが！ポイントが入ってきている！

「会長、今日は手弁当ですか？」

「ああ。田舎の爺様が野菜を大量に送ってきてくれてな。これでも料理には自信があるんだぞ？」

もう数年は料理してないよ、私。生活費をギリギリまで切り詰め、稼いだ分も含め余剰金は寄付につき込みポイントを獲得する極貧生活。我が家の食卓に並ぶのは基本缶詰。もはやエネルギー供給ができればなんでもいい境地。

「お昼、おっひるー♪わあ！今日はお弁当ですかー！美味しそう！」

ポワポワな藤原さん、チツスチツス。

今日も癒しをありがとう。

「そうだろう？全部俺の手作りだ」

「いいなー。一口分けて下さいよ」

「ん？別に構わんぞ」

「ほんとですか！」

「ではこのハンバーグをやろう！」

「やったー！」

間接キスう?! 白銀、オマエ!!むつつりスケベじやなかったのかッ!?（思い込み）

そんな平然と、か、かか、間接キスなんて……。

「どうだろうか。四宮と所場も食べてみるか？」

「ええ、是非」

躊躇いなく頷く四宮。

ふむ……さては罫だな？（迷推理）。四宮だけに声をかけたいところを優しい白銀の事だ。私のように嫌いな相手であつても一応の気遣いをしてくれる紳士なのだろう。

私は知っている。

ここで頷くと『あつはー。マジで食べちゃう、キミ?』みたいな複雑な顔をされることを。

社交辞令って大切だね。

「……いえ。見たところあまり量もありませんし私は大丈夫です」

私と間接キスなんて嫌だろ？たまにしか起こらないラッキーイベントだ。女の子の味を楽しみんさい。

「でしたら私のお弁当はいかがですか？料理人の興が乗ってしまい、いつもより量が多めです。問題ありませんよ？」

「ここでそうくるう??」

「なんで？」

「あなたが一番私の事嫌いな筈でしょう？」

「いえ、でも悪いですし」

「大丈夫です」

「いえ」

「むしろ食べられるか不安なので、手助けしていただければこちらとしても助かるのですが……。どうでしょう？」

「これは……食べないとポイントが減る気配がある。もしかして食べ物の中に何か毒物でも入っているのか。」

「だが、食べる以外に選択肢がない。」

「ちくせう。」

「では、ありがたく頂きます……」

「はい、どうぞ」

女子に食べさせてもらう夢のシチュエーション。

だけど何故だろう。冷や汗が止まらない。ゆっくりと顎を動かし、慎重に味わう。舌の上で溢れ出す肉汁。旨味が際立つ濃厚な香り。

タレの中に隠れる素材本来の甘みや風味は、一噛みすることに脳を刺激する。

「……美味しいです。こんなにも美味しいものは久しぶりに食べました」

普通に美味しかった……!

まさか、私が四宮を疑う事まで見越して疑心暗鬼になっている私を見て愉悦に浸っていたのか。

貴女が愉悦部か!

「ん? そういえば所場。自分の昼食はどうした?」

何を当然のことを。ははっ。

「昼はいつも食べていませんよ? まあ、ダイエットのようなものです」

白銀に食材なんかを差し入れている手前、家計が厳しいことは言えないし。

まあ缶詰生活はポイントのために好き好んでやってることだからね。

「ダイエットをする程太っているように見えはないのだが、そこまで気にすることなのか? 過度な食事制限は身体に毒だぞ」

「大丈夫です。栄養バランスは考えていますから」
考えていない。

「高校生はまだ育ち盛りですよ？昼を抜けば学園生活にも支障をきたす可能性もありますし、やはりしっかりと食べた方がよろしいかと。」

ほら、今回は私が食べきれない分を紙皿に分けましたので召し上がって下さい」

おっふ……。仕事してポイント貯めたいんだが。でも断るとそれもポイント減……。

というか、どうして急にこんなに押しが強くなったの君達？本格的に私の事潰しかかっている？仲良しのフリして後で盛大にお前の席ねえから!!するつもり？

「……お気遣い感謝します」

「いえいえ、いいのです。なんでしたら明日からは所場さんの分の昼食も料理人に作らせます。」

「いえそれは流石に」

「いいですね、かぐやさん！昼食も、みんなでワイワイしながら食べましょう！きつと楽しいですー！」

藤原ああ?!お前は人のセリフを遮るのが趣味かこの!!

可愛いからって何やっても許されると思うなよちくしょう!ああ、もう可愛いなあ!

許す!!

「いいですね、所場さん？」

「……はい」

君らがもし本当に、お前の席ねえから！なんてしようものなら私はBOO●OFFなのに本ねえじゃあん!? って言い返してやるウ!!!?

やるつもりだ!!?

やるかもしれない!?

やれない!

『本日の勝敗、所場十八の負け』

——1年前——

「……貴方が白銀さんですか？」

校舎の隅で昼食を食べる白銀御行。

前情報通り端正な顔立ちをしている。それにグレている。ポイントも獲得しやすそう。じゅるり。

「……誰ですか、あんた？」

睨まないで、こわいよ。

私は貴方にとって都合のいい人間なんだ。貴方が報われれば私も報われる。雑用のごとく利用してくれ。私もポイントのために利用する。

「生徒会長の命令で一年生から生徒会の人員を集めていまして。どうでしょう、色々の特典もありますしやってみませんか？」

「何で俺なんかが……。」

なんの取り柄もない外部生で

「むしろそこがいいんです」

マイナスからの出発の方がこちらの善行としてもポイントの幅が広がる。

「……家柄も、才能も……俺には何も無い」

調べたから知っている。だからこそ声をかけている。私にとってそれが何よりも好都合なんだ。

「貴方の諸事情は多少なりとも聞き及んでいます。まずは見学からでも良いので、やってみませんか？」

「……………」

「それと、これは単なる提案なのですが……。私の知り合いが良き働き手を探していま

して、そちらにもご助力願えませんか？

聞くに白銀さんはバイトを探しているとの事。決して学業に支障をきたすようなものではありませんし、お給金も弾んでくれるようです。他の方々にもお声がけしておりますし、怪しいものではありません。

どうですか？」

「なんで、そこまで」

「全て私の為です。私がそうしたいからにつきます。だから何も遠慮はいりません。貴方の頑張りが報われれば、それだけで私は得るものがあるのです」

外部生である「混院」の生徒は小等部からの所謂「純院」の生徒より助けを求めている割合が多いから、ポイント獲得の良きカモなのです。ぐへへ。

ポイントくれ。

……結局、混院の生徒からポイントが得られたのは最初の2ヶ月だけだった。あいつら頭いいじゃないかチクシヨウツ!!

生徒会は一緒に食べたい（裏）

side 白銀御行

「会長、今日は手作り弁当ですか？」

「ああ。田舎の爺様が野菜を大量に送ってきてくれてな。これでも料理には自信があるんだぞ？」

藤原書記を新たに共同戦線メンバーに加えた数日前。

あの日、俺たちの覚悟は決まった。俺の最終目標はお前と笑い合いながらハグをする事だ、とうよう十八！

熱い抱擁を待っているがいい!!

「お昼、おっひるー♪わあ！今日はお弁当ですかー！美味しそう！」

「そうだろう？全部俺の手作りだ」

「いいなー。一口分けて下さいよ」

「ん？別に構わんぞ」

「ほんとですか！」

「ではこのハンバーグをやろう！」

「やったー！」

「ここまではあくまで場を温めるやり取り。ここからが勝負だ。」

「どうだろうか。四宮と所場も食べてみるか？」

「ええ、是非」

四宮が乗るのは予定通り。十八は……。

「……いえ。見たところあまり量もありませんし私は大丈夫です」

ふっ。その答えは予測パターンのうちのひとつだ！ さあ、仕掛けるんだ四宮！

「でしたら私のお弁当はいかがですか？ 料理人の興が乗ってしまい、いつもより量が多めですので問題ありませんよ？」

「いえ、でも悪いですし」

「大丈夫です」

「いえ」

「むしろ食べきれるか不安なので、手助けしていただければこちらとしても助かるのですが……。どうでしょう？」

頼まれてしまえばなかなか断れないのが十八だ。多少強引でも領くしかあるまい。

「では、ありがたく頂きます……」

「はい、どうぞ」

一流のシェフが作ったであろうその料理が四宮の手によって十八の口へ運ばれていく。本来行儀の悪いはずのその行為が二人の所作の一つ一つによってまるで絵画のごとく完成された一つの美のようだ。

……。

俺は一体何を言っている。

というか……なんて幸せそうに食べるんだ十八。何故だか空気がポワポワしているぞ。

破壊力たけえなおい！普段あまり表情が変わらないからこそこのギャップ!!

え、何この胸の高鳴り。

これが——恋？って違うわ。

十八にバレないよう声を抑えて話しかけてくる四宮と藤原書記。

「どうした？」

「会長。……何でしょうかあの所場さんは。何故だかこう、すごく胸にくるものがあるのですが」

それな。

「会長、かぐやさん！なんだか十八さんがすごく可愛いです！例えるならぬいぐるみみたいな可愛さです！あれはすごい!!」

それな。

「……美味しいです。こんなにも美味しいものは久し振りに食べました」
「ん？そういうえば所場。自分の昼食はどうした？」

思い返せば十八が昼食を食べているところを見たことがない……？

「昼はいつも食べていませんよ？まあ、ダイエットのようなものです」

「ダイエットをする程太っているようには見えないのだが、そこまで気にすることなのか？過度な食事制限は身体に毒だぞ」

「大丈夫です。栄養バランスは考えていますから」

確かに見たところ健康状態が悪いようには見えない。だが、特別そういった方面に造詣が深いわけではない俺の視診などあまり意味はないだろうし。

「高校生はまだ育ち盛りですよ？昼を抜けば学園生活にも支障をきたす可能性もありますし、やはりしっかりと食べた方がよろしいかと。」

ほら、今回は私が食べきれない分を紙皿に分けましたので召し上がって下さい」

「……お気遣い感謝します」

「いえいえ、いいのです。なんでしたら明日からは所場さんの分の昼食も料理人に作らせませす」

「いえそれは流石に」

「いいですね、かぐやさん！昼食も、みんなでワイワイしながら食べましょう！きつと楽しいです！」

ナイスアシスト、藤原書記！

「いいですね、所場さん？」

「……はい」

そうして昼食時は生徒会室にて“4人”で食べるのが決まり事となった。

そこに石上会計が追加されるのはそれから暫く後のことだった。

まじごめん。

「会長。この作戦の前に十八さんの事、所場じゃなくて十八と呼ぶって息巻いてたじゃないですか」

「うぐっ」

藤原書記の口撃が白銀を襲う。

「会長の事です。内心では十八と呼んでいるではありませんか？」

ふふふ、お可愛いこと」

凶星。四宮の口撃が白銀の急所にあたる。

「チキン」

「ぐはっ」

白銀撃沈。

田沼翼は告白したい（表）

——放課後——

共同戦線改め、所場を攻略し隊（藤原書記命名）。

白銀御行。

四宮かぐや。

藤原千花。

略称）攻略隊メンバーの彼ら3人は、学校の一室を貸し切って作戦会議を行っていた。「一先ず、食事を共にするという第一段階を終えた」

机に両肘を立てて寄りかかり、両手を口元に持つてくる白銀。

終始謎の威圧を発しながらもその行為の全ては今浮かべているにやつき面を隠すために行われていた。

「ところで、確認しておきたいのだが……二人は所場の連絡先を所持しているか？」

それというのも、少し前に白銀は遂に所場と連絡先を交換することに成功！

二人に対し一歩先を行った白銀の内に溢れるのは優越感のみ!!

一年生時に、さながら彼女から貢がれる彼氏のごとく所場から誕生日プレゼントとしてスマホをもらっておきながらおよそ数ヶ月！連絡先を聞こうと口を開いては言葉にできず震える日々。

そんな思春期女子ムーブをかましてきた白銀もついに勇気を振り絞って連絡先の交換を申し入れ。

（……まで、長かった……！）

達成感に打ち震えていた。

「まあ、持っていないだろうが。」

実は先日――

「ええ、持っていますよ。中等部の頃ですが所場さんから」

「（はああ?!）はああ?!」

「あ。私も持っていますよー。かぐやさんが交換している時にその場にいたので流れで」

（え、は？え？恥ずかしッ!!）

もしまだ二人が交換していないのなら仲介してやろう的な！俺だけが両方の友達ポジション的な！そんな事考えてた俺なんなの!?!）

自慢げに携帯を取り出す二人だが、しかし内心は冷や汗が止まらずにいた。

この二人。連絡先を交換して二年以上経つ現在、一度も所場とメールのやり取りをしたことがなかった。

メールを消しては打ち、消しては打ちを繰り返した二人は無論白銀よりも乙女していた。

「……そうか。では次の作戦なのだが——」

三者ともに己の心の内がバレていないか戦々恐々としながら話を進めた結果、議論はスムーズに煮詰まり次の作戦が決定した。

同刻・生徒会室。

side主人公

今日はまだ白銀達は来ていないのか。珍しい。

だが、仕事が捗るのでまあよし。

ゴトツ。

つと、ポケットからスマホが落ちてしまった。

「……………」

……少し前、業務連絡用にと白銀から連絡先交換の申し入れがあり一応生徒会メンバーのは全部入手、か。メールのやり取りなんて石上君としかしてないけれどもね。

四宮も話すだけでポイントがもらえる内に交換したはいいけど、結局その後すぐに嫌われてあまり話さなくなったし。

何だっけ。『貴方のそういうところ、本当に嫌いです』だったかな。

いや、そういうところってどういう所よ。

思わず口にしてしまった感のある四宮の表情がまさしく心からの言葉だという事を痛感させて泣きなくなった。

まあ笑って済ませましたけどね（震える余裕）。

話すだけでポイント獲得ならメールでも同じだろうって浮かれてたらこのざまですよ。

ガチャ

おっと、白銀か——。

へ？

「失礼します。実は相談に乗っていただきたいことがありまして!! 所場様アア!!!」
「いや、落ち着け。」

「どうぞ、紅茶です」

「あ、ああありがとうございます!!」

おい、何故震える。別に毒は入っていないぞ少年。とかさつきの所場サマって何? ……む。もしかして罰ゲームか何か? だからこんなに震えて? あはは、青春ダネエ。むっつりは心優しき紳士だよ。付き合ってあげよう。

つまりあれだろう? その生徒会室の扉の向こうではお仲間が君を監視していると。罰ゲームに生徒会を選ぶとはなかなか度胸がある。

四宮が居たらやばかったぞ。

「ところで田沼さん、相談とはどういった内容で? 私でお力添えできることがあればよろしいのですが」

ほれほれ、具体的にどんな罰ゲームなんだい？話してみんさい。

「え、なんで僕の名前」

ここ秀知院学園は富豪名家の子息令嬢が多く在籍している。ちよつとした不興でも大幅なポイント減に繋がる可能性がある以上、情報は何よりも重要視するもの。

ポイント獲得としてハイリターンではあるけれどハイリスクでもあるのがこの学園。最大限気を使うのは当たり前。

家柄調べるついでにスリーサイズも調べた私は己が正しき道にいると信じている。無論、男子も例外ではない。

男女平等はむつつり以前に紳士の鉄則。私は決して変態紳士ではないが。

「幼等部から大学までの生徒は一通り把握しております。秀知院に属している以上、貴方方生徒は私が最大限敬意を払うべき方々ですから。それに、生徒会の一員としては当然です」

私の気持ち悪さ（認めはしない）を一応生徒会に擦りつけておく。

天才秀才の生徒会の事。どうせ白銀達も覚えているさ。むしろ覚えていなかったら四宮に抹殺されるのもありうる。

あれ？なんか今寒気がした。というかポイントがほんの少しだけ減った。

四宮達が私の陰口でもしているのだろうか。

……あの三人で陰口を言い合ってるのを想像すると少し微笑ましく思う私はやはり心優しき天使。

「さ、流石です!!」

うむ、流石生徒会だよね。

「ありがとうございます。」

それで、お話とは？」

「えーっと、実は……その」

顔真っ赤にしてまるで告白のようではないか、あはは。

「僕……好きな人ができまして。」

その方はみんなに尊敬されていて、僕とは別世界に住んでいるような方なんです。けど、気持ちは抑えられなくて」

ふむふむ、罰ゲームの設定的には四宮かな？

「その男性はとても魅力に溢れていて！決して男が好きなわけではないんです!!その方という存在そのものが好きなんです！」

ふむふむ、白銀かな？

「険しい道のりなのは重々承知しています！お付き合いするにはどうしたら良いのでしょうか？」

罰ゲームでホモ宣言、と言いたいところだが……。

彼の表情はマジモンのマジ。

これはもしかして、罰ゲームに乗じて本気の相談をしてきている？やはり世間一般的に言えばホモは相談しづらい事。ずっと誰にも言えず苦しんでいたのかもしれない。

ホモ。

それは、子孫繁栄を目指す種の観点からすれば一種の過ち。けれどそこに愛があるのならきつと人として間違つてはいないのだ。

私の周りにもそういう人は結構いた。

私が貴方の唯一の理解者だ。

だから、ポイン(略)

「貴方の覚悟、しかと伝わりました。貴方の言うとおり、それは峻険な道。生半なものでは辿り着けぬものなのでしょう。」

ですからまずは出来ることから始めてみてはどうですか？」

「出来ること、ですか……？」

「漢を磨くのです。貴方が好いているお相手が男性である以上、その方の恋愛対象である女性と同じ土俵で勝負しても難しい。」

なればこそ、男性としての魅力を高めなさい。それはきつと貴方の人としての魅力に

つながる。

その魅力は男女問わず伝わるものです。

たとえ結果が振るわなかったとしても、貴方が築き上げたものは貴方の良き人生に貢献してくれませう」

（女神……だったのか（真剣））

あ、ポイントが入った。

これは新たなカモが手に入ったかもしれない。

これから定期的に相談に乗ればポイントガツポガツポ。

でも、白銀は純然たるストレートだし……。ま、結果がダメでも流石に私のせいにはしないよね、君。

「今後の相談の為に連絡先を交換しておきましょう。チャットツールは使っておりますのでメールになりますが、よろしいですか？」

「は、はい!!宜しくお願ひします!」

純朴な少年、田沼くんはその日からハードな筋トレを始めたそうだ。

違う、そうじゃない。

メール

From：田沼翼

To：所場十八

こんばんは。

今日は小胸筋を中心に鍛えました。

小胸筋は烏口突起という肩甲骨の前側の突起部分から肋骨についている筋肉です。

簡単に言えば大胸筋の内側下の筋肉になります。

どうやらデスクワーク等で小胸筋は硬くなりやすいそうです。

生徒会はデスクワークも多いと聞きます。

今度は非ご一緒に小胸筋を鍛えましょう！

「……………うん。……………いや……………うん。

マジごめん、田沼くん」

田沼翼は告白したい（裏）

生徒会室前

side 四宮かぐや

「あら、会長。急に立ち止まってどうしたのですか？」

扉に手をかけた状態で動きが止まった会長に、私と藤原さんは疑問符を浮かべる。

「どうやら中で所場と男子生徒が何か話しているようだ」

耳をすますと扉の向こうからそれらしき声が聞こえてきた。

《ところで田沼さん、相談とはどういった内容で？私でお力添えできることがあればよろしいのですが》

相談事ですか。生徒から生徒会への相談はよくあること。内容は多岐に渡りますが、その都度適任のものがその解決にあたってきた。

《え、なんで僕の名前》

《幼等部から大学までの生徒は一通り把握しております。秀知院に属している以上、貴方方生徒は私が最大限敬意を払うべき方々ですから。それに、生徒会の一員としては当

然です》

「……四宮と藤原も把握しているか？」

扉の隙間から中を伺いつつ、呟く会長。その心情は察して余りある。やろうと思えば出来ないことはない。むしろ私ならば容易いことでしょう。

けれど、それを行う労力を考えれば普通はやらない。やろうと思わない。ただただ面倒くさい。

「……いえ」

「無理ですよ……。幼等部から大学つて生徒数は何千人にのびります。それを生徒会としては当然つて、十八さん基準の生徒会つて一体どんな組織なんですか。流石に生徒会にそこまで求めてる生徒はいませんよ」

「だよな！」

でしようね。

《さ、流石です!!》

《ありがとうございます。》

それで、お話とは？》

《えーつと、実は……その》

隙間から僅かに見えるその男子生徒の眼差しは熱を帯びている。

《僕……好きな人ができまして。

その方はみんなに尊敬されていて、僕とは別世界に住んでいるような方なんです。

けど、気持ちは抑えられなくて》

なるほど恋の相談でしたか。それなら先程から目が泳いでいるのも理解できます。しかし、ならば尚の事私達は盗み聞くべきではないでしょう。

ここは中に入って話を聞くのが――。

《その男性はとても魅力に溢れていて！決して男が好きなのではないんです!!その方という存在そのものが好きなんです!》

は？

「は??」

「ヴえ?」

《険しい道のりなのは重々承知しています!お付き合いするにはどうしたら良いのでしょうか?》

「俺の聞き間違いか……!?今、あの男子生徒の好きな相手が男性だと聞こえたのだが!!」

「いえ。私にもはつきりとそう聞こえました」

「私ものです。けどこれは……ううん」

恋の相談と聞き高揚していた藤原さんはその恋路が男同士のものだと判明し悩ましげ

に唸っている。

会長に目を向けると何故か若干顔を青くしていた。

……「別世界に住んでいるようで、みんなに尊敬されている方」って。

ああ……。

「もしかして会長のことではありませんか？」

「なんでそうなる!?!勘弁してくれ!」

「比喻ではありませんが、別世界に住んでいるようとの事ですしみんなに尊敬されるとい
うのはこの秀知院学園の生徒会長であり学園模試トップを走り続ける会長に当てはま
りますよ?」

それに大層おモテになられるとの事で

「いやいやいや、絶対じゃない!!」

「反証なき主張はただの詭弁ですよ」

「うっ、く。……み、見てみる。あの男子生徒が所場を見る目は明らかに普通のそれじゃ
ない。」

先程の条件ならば所場にも当てはまる。つまりあの生徒が好きなのは所場であり、今
まさに相談に見せかけた告白……を……告白!?!」

《貴方の覚悟、しかと伝わりました。貴方の言うとおり、それは峻険な道。生半なもので

は辿り着けぬものなのでしょう。

ですからまずは出来ることから始めてみてはどうですか？》

微塵も伝わってなかったー。

遠回しな告白をした男子生徒は伝わらなかったことに若干気落ちしたのか肩を落と
している。

《出来ること、ですか……？》

《漢を磨くのです。貴方が好いているお相手が男性である以上、その方の恋愛対象であ
る女性と同じ土俵で勝負しても難しい。

なればこそ、男性としての魅力を高めなさい。それはきつと貴方の人としての魅力に



慈愛に満ちた眼差しで言葉を紡ぐ場所さんに男子生徒はすっかり見惚れている。

「……俺は時々所場の性別が分からなくなる」

「一部女子に、私の中の女のプライドが死んだ原因とまで言われてますからね。あの男
子生徒が十八さんにほの字になってしまったのも仕様がなと思いますよ」

藤原さんの言葉に僅かに首を傾げる。

確かにあの所作や容姿、性格であれば男性に好意を抱かれるのもまあ理解はできま
す。

けれど私は彼と接していて一度たりとも女性としての劣等感などを感じることはなかった。

無論私が女性として誰かに遅れをとる事などありはしませんが。そういう事ではなく、記憶にある彼の行動の多くは基本的に男らしいと言われる行動だったはず。

轆かれそうな犬を助ける彼を送迎の車から見た事がある。

落し物をした生徒の為に埃まみれになりながら放課後ずっと探し続けていた事も知っている。

お婆さんを背負って道案内をしていたなんて遅刻理由が信じられるのも彼くらいのものでしょうか。

誰にも言わず誰にも知らせず、助けを求めてきた人にはその結果だけを見せてきた彼の努力を私は見てきた。

《今後の相談の為に連絡先を交換しておきましょう。チャットツールは使っておりませんのでメールになります。よろしいですか?》

《は、はい!!宜しくお願いします!》

そのやり取りに会長がシヨックを受けていた理由を私は知らない。

「あれ、どうしたんですか?会長オ?

「なんだか落ち込んでません?」

「藤原！クツ……！何でも、ない」

—— 3年前 ——

度々話しかけてくるようになった所場さんを雑にあしらい続ける日々。近侍の早坂に素性を調べさせました。けれど結果は平凡なもの。

零細興信所元所長の息子。

けれど両親は既に他界しており、現在は母方の祖父母を頼りに一人暮らしをしている。

事務所は今も存続しており、彼の父の後輩が後を継いだ模様。

両親の死因は不明。祖父母の所在も不明。中等部になって復学した彼が小等部1年の夏からこれまでどのような過ごし方だったのかも不明。

既出の情報に疑わしいものはなかった。けれど意図的に情報が伏せられている部分があり、不明な点の方が多い。その時点での彼の評価は信用ならない者。

判明している情報から判断しても、四宮として利用できるものは何も無い。私が関わる必要のない虫ケラ。

それでも私は彼個人が信用に足る人間なのか試したかった。綺麗なだけの人間がいるはずはないと、彼の裏を暴き安心したかった。

『秘密の共有』

絶対に話してはダメという口上から始まるその秘密を彼が漏らさないのかどうか。

およそ数日。

早坂が噂が出回っていないか調べさせたけれどその気配は微塵もなかった。それどころか彼からその話題に触れる様子もない。

もしかして彼は私の話を忘れているのではないか。

そんな事が頭をよぎりこの秘密の共有を繰り返す事十数回。全く噂が出回らない事が信じられなかった私は何故周囲に話さなかったのか彼に問う。

なぜ話すと思ったんですか？とあつけらかんという彼の言葉に、知らぬうちに強張っていた肩の力が抜けていた。

所場十八は隙あらば語りたい（表）

ゴミをポイ捨てする。

↓ポイントが減る

わかる。

ゴミを拾う。

↓ポイントが増える。

わかる。

落ちているゴミを素通りする。

↓ポイントが減る

まあわかる。

ポイ捨てしている人に注意をしない。

↓ポイントが減る。

……あはは。

一般道徳に反する行いをするのみならず知らぬ存ぜぬを通すだけでポイントが減

る事が最初の数年で判明した。

条件厳しッ。

side 主人公

ここ最近を振り返って思う。

もしかして私は生徒会メンバーにそこまで嫌われていないのではないかと……と。

そもそも私が彼らに嫌われていると思った根拠は、私の何かしらの言動に対してポイントの減りが見られたから。

ポイントが減るということは相手にとってなんらかの不快感があったということ。

自分に不快な思いをさせる相手を嫌うのは自然な事ではあるので納得できる。だからこそ彼らの私への態度はどこか余所余所しかったのだろうし。

しかし、最近はむしろ積極的だ。私は生徒会メンバーの好感度が知りたい。

ただし四宮は除く。

彼女には面と向かって嫌いだと言われている。むしろ同じ生徒会に所属していながら時々しかポイントが減らないのは、既に彼女が私を社会的に抹殺する謀略を立てたか

らなのではと戦々恐々としている。もしくは私を揶揄って遊んでいるのか……。
外面的なヘマはしていない……と思う。

生徒会メンバーはともかく一般生徒や教師陣からは頼りやすい、押し付けやすい生徒と見られている。

教師からの雑用だつて自ら名乗り出ているのだからその認識に間違いはないはずだ。

そこで生徒会。

正直、白銀と藤原に嫌われる行動をしたかどうか私には心当たりがない。けれどたまにポイントが減るのも事実。

だからこそ彼ら3人だけの生徒会室はどのような会話がなされるのか盗み聞く事にした。

基本的に放課後は3日に一度しか顔を出さない私（ポイントが減らないギリギリのライン）。今日は来ないと思つて彼らの口も軽くなるだろう。

私についての話題が日常会話程度であれば一応生徒会に所属しているよねくらいの好感度にランクアップ。嫌いよりは少しマシな立ち位置。

私の話題が微塵も出なければ、嫌いから無関心にランクアップ。ポイントへの危険度は下がる。

覚悟を決め、私は扉の隙間から生徒会室に耳を傾ける。

《——》今日は所場が来ない日だったな。ならば都合がいいか》

《ええ》

《次は4人でゲームしたいです》

あはは死んだ（好感度）。

……私は静かにその場を後にした。

まさか、二人も四宮の謀略に加担していたなんて。

どうりで最近の3人は仲良さげだったわけだよ。私を揶揄って楽しんでいたということか。ポイントの対価がこれ。クツウウ。甘んじて受けよう。

こちらもちちらの都合を押し付けている身。偉そうな事は言えない。

四宮。やはり恐ろしい娘だ。

揶揄われている内はまだいい。

本格的に潰しにかかってくる可能性がある以上、その前にポイントを貯めきらないと。

なるべく四宮の言う事は聞くようにしよう。あ、これまでと大して変わんねーや。あはは笑えない。



高等部に上がつてすぐの事。

中等部生徒会雑用枠だった私は当時の高等部会長や校長の許可の下、再びその役職に就くことが叶った。

文字通り雑用。

生徒会の面々や教師から仕事を押し付けられる日々にウハウハだった私。

さらにポイントの獲得機会を増やそうと外部生に目をつけた。

過ごしてきた環境の違いからくる空気感はお互いの差別意識を助長し、中等部上がり
の純院生と外部から来た混院生との間に見えない壁を生んでいた。

やたら顔が広かった私とその取持ちを果たそうとして、

——普通に失敗した。

我ながら余計な事をしたと思つている。誰かから頼られるのではなく自分で動く事の危険性をその時に改めて理解した。何故だか幸いな事にポイントは減らなかつたけれど。

結局私が掻き乱したその空気を変えてくれたのは外部生でありながら定期考査一位

を勝ち取った白銀。

私力が力になれた事といえれば外部生の学力を少しばかりあげること。

それも今では全員が私よりテストの順位が上。勉強に関して私が頼られたのは最初の2ヶ月だけだった。

ただただ周囲にとつて都合がいいように振舞って相手が望む言葉をかけて、その場凌ぎの善良で許されるならどれだけ楽か。

以前はそれで万事上手くいっていた。

善良性に伴う責任の重さを今生になって理解した。

全容は掴めないものの、ポイントの基準は相当に面倒なものなのだろう。

私を嫌う人。揶揄う人。視界にも映らない人。

周囲のすべての人間が私をただ利用するだけの存在ならいいのに。

アフターケアには細心の注意を払った。私が及ぼした影響がどこまで広がるのか、どんな結果を生むのか。言葉を発する際は頭で何度も反芻して、どう行動すれば私の影響が少なくて済むか考え抜いた。

善行をする際はしっかりと保険もかけていた。相手には正直に私の為だと話していたし、自主的に動く時はなるべく物事を解決してから当事者に報告していた。

それでも、四宮の不興を買ってしまった。

やはりこのままでは駄目だ。

四宮に謝ってポイント獲得に専念できるようにしよう。

そうしないと私の胃がもたない。ストレスの重みで胃が溶けている錯覚を起こす。この時期に入院しようものなら100万ポイント達成は不可能。

四宮への謝罪時に多少ポイントが減ろうとも今後四宮関連でポイント減少への心配がなくなれば御の字。

土下座から靴舐めまでが許容範囲だけど、それで許してくれるかな。

あとは謝るタイミング……。

なるべく四宮の機嫌がいい日に呼び出そう。怖いし。

この人はこういう人間だ、と一人一人の人間性を仮定し情報としてまとめる。

その人と接する際にそれらを利用し、最善手を取る。

それが私が培ったコミュニケーション能力。誰もがやっている、当たり前のこと。

藤原千花は普通に優しい女の子だ。誰かに優しくしようなんて考えは微塵もなく、彼

女らしさの中に優しさが漂うような女の子。

空気を読むことをしないのは誰もに等しく接するから。

そんな彼女は誰かの幸せを自分の幸せとして分かち合う事ができる。

こころ善き人。

四宮かぐやは、脆い女の子だ。

誰かと接するのが怖くて、傷つけるのも傷つくのも恐れている臆病な女の子。

周囲に強く当たるのは自分を守る為。それが彼女が子供の頃から培った処世術だったのだろう。

だからこそ、彼女が積み重ねたのは成長ではなくただの適応と言える。

彼女らには彼女らなりの積み重ねた過去があり経験があり、見てきた景色がある。

それら全てが彼女達の今を作り上げていると考えれば、多少の特異性も良き個性だと思えた。

だからこそ私から見た彼女達は、年端もいかない普通の女の子だった。

それが中等部時代に仮定した彼女達の人となり……………だったんだけど

なああああ。

付け入る隙が大きいからこそ私は彼女達に近づいた。が、結果待っていたのは大魔王

と邪神みたいな女の子だった。

四宮かぐやは私の事が嫌いだと言う。

藤原千花は私と目を合わそうとしない。

外面を取り繕うのが得意だったはずなんだけど、どこでぼろが出たのか。
とにかく。

彼女達は見抜いたのだ。私の人となり。

変態のむつつりである事を。

ちくしよめ。

所場十八は隙あらば語りたい（裏）

つまるところ白銀御行はこの時既に所場十八の危うさを理解していた。

本日分の職務を片付けたところで、白銀は天井を見上げながら呟いた。

「——今日は所場が来ない日だったな。ならば都合がいいか」

その声音が僅かに硬いのは、これから話す内容が事由だった。

「ええ」

「次は4人でゲームしたいです」

「いや、悪いが藤原書記。」

今回は俺から2人に協力を仰ぎたい事があつてな。話を聞いてくれると助かる」

会長からの協力事と聞き、四宮と藤原は白銀へと顔を向けた。

未だ視線を僅かにずらしている白銀は、視界の隅でその2人の反応を確認し鼓動を

速くする。

「何です？」

いつもと変わらぬ藤原の様子にこちらの緊張はバレていないのだと安堵した白銀は意を決して話を切り出した。

「近々バレーの授業が始まるのだが、その練習に付き合つてほしい」

「え、会長つてバレーできないんですか？」

藤原の純粹な疑問。

その言葉に内心絶叫しながらも、あくまで平静を装う白銀。

「ん、……少々苦手だな。まあそれだけではないのだ。男同士の友情とは闘争の中で築かれる事もあるという。所場と仲を深める絶好の機会だと思ふのだが」

所場と友情を深める絶好の機会。無論白銀の本心だ。

けれど、今回においては真意を覆う隠れ蓑でもあつた。

それは見栄。

白銀の中には常に、完璧な生徒会長という理想像があつた。これまでもそれに従つて行動してきたし周囲にはそう思われるように振舞つてきた。

そして1人の男として、彼は救われるだけの男ではありたくなかつた。

彼の側にはいつもその身を削る生き方をする男がいた。

一年生の頃の白銀は早い段階で————所場十八にとっては全ての者が救うべき対象なのだと理解させられていた。

だからこそ彼は見せつけなければいけない。

「俺はお前が救う必要がないほどに、強い漢になったのだ」と。

所場十八の隣に並び立つ。

その為の見栄が、白銀御行が思い描く完璧な生徒会長という理想像の理由の一つだった。

「好敵手と書いて『とも』と読むというやつですね！」

熱い想いを胸に秘めた白銀だったが、勿論バレーが下手というのがただただ恥ずかしいという気持ちも多分にあった。

むしろここにきてその気持ちは増していた。

「そう、それ！」

藤原は都合良く解釈してくれるな。ちよろくて助かるな。などと失礼な事を考えながらも、心の中では合掌と土下座を繰り返しながら感謝を示す白銀。

「いいですねー！協力します！」

「藤原さん。そう安易に承諾しない方がよろしいかと」

（あ……やべ。四宮忘れてた）

特大の地雷原を無意識のうちに避けていた白銀は、四宮の言葉に背筋を凍らせる。

「え？かぐやさん？」

「またですか、会長？」

光の灯らない瞳を向けられた白銀は、その言葉に宿った覇気に当てられ四宮へと目を向けてしまう。

逃げる事を許さぬ四宮の瞳に白銀は両の目を背けることもできずに眩いた。

「クツ。ああ……また、だ。頼む」

「ええ、ええ、構いませんよ。所場さんの事に関しては協力体制を敷いていますので。協力を仰ぐ事は何もおかしくはありません」

「なら——」

「ですが、あまりに労力が大きい。

私は昨年の事を忘れていませんか？今回と同じようにスポーツの練習に付き合わされた私の苦労。借りとして覚えありますよね？」

完璧を求める白銀が四宮と藤原を頼る事が出来たのは積み重ねた信頼と……四宮への弱みによるところが大きかった。

去年。

未だ白銀と四宮がお互いに所場との仲について協力関係になかった頃。

その当時はお互いがお互いを目障りな者、邪魔者扱いしており、両者足の引つ張り合いを繰り返していた。

その最中に四宮が白銀の弱点を探し出し、スポーツが苦手だというのを暴いたのが所場十八への共同戦線を張るきっかけでもあった。

四宮からしたら単なる気まぐれ。平身低頭で弱みの口止めとスポーツの指導を頼み込む白銀。

ここで手を差し伸べたとて目障りだった者へ貸しを作ることができる。

それにこちらが弱みを知ったという事実は消えない。

それは打算からの関係。

そして、お互いに確かな仲を育むきっかけにもなった出来事だった。

「も……ちろんだ」

「あのく。かぐやさんはさつきから何のことを言ってるんです?」

「会長は運動音痴なんです」

自覚してはいるものの改めて他者から言われ、白銀は精神的ダメージを受けた。

「わかっていますよ? さつき会長自身、バレーが苦手って仰ってたじゃないですか」

「バレーが苦手なのではなくスポーツ全般何も出来ないのです。」

よく覚えておいてください。会長は文字通り何も出来ません。ゼロからどころか

マイナスからのスタートになります」

「いやいや、四宮。流石にそれは言い過ぎヒイイ!? ……ごめん……」

「それで藤原さんはどうします?」

「大丈夫ですよ、かぐやさん。」

運動音痴といっても限度がありますから。協力しますよ! 会長!

「感謝する、藤原!」

四宮に抉られた心を癒してくれる藤原に白銀は後光を幻視した。

「前言撤回は認められませんかね」

「大丈夫ですってー! かぐやさんは心配性なんだか——」



「うあ?!?!」

どうしてそうなるんですか!？」

体操着に着替え、3人は体育館へと移動した。

まずは白銀の現時点でのバレー技術を確認しようとサーブを打たせた所、結果は

散々なもの。

四宮の言葉をようやく理解した藤原は、安請け合いした十数分前の己に飛び膝蹴りを食らわしたい気分だった。

「わからん。何度やつても自分の頭に手がぶつかると今度はタ
イミングが合わない」

ボールではなく自分の頭を打ち抜いた白銀は心底疑問だという顔を浮かべながら
ボールと手を見つめた。

「目を瞑って打ってればそりやそうなりますよ!!ボールを打つときはしっかり目を開け
てくださいい!」

「はは!何を当たり前のことを」

「…… 会長。これをご覧ください」

四宮に差し出された携帯の画面を覗き込んだ白銀は、そこに映し出された自身のサー
ブを目の当たりにし驚愕に目を見開く。

「え……嘘。もしかしてこれがイッパスなのプベウツ!!?」

唐突に頬へ飛んできたボールに、碌な受け身も取れず床に滑り込む白銀。

数秒身悶えた後、事の元凶へと僅かに痛む頬を抑えながら詰め寄る。

「な、何をする四宮!」

「鳥漕がましい。」

私は何本か会長に向けてサーブを打ちますので、しつかりと見て自分の中のイメージと照らし合わせて下さい。藤原さんはボール出しをお願いします」

「は、はい！わかりました！」

再びボールを掴みコートに張られたネットの向こうへ移動する四宮に、白銀は以前の特訓の恐怖を思い出して身震いした。

「会長から頼まれたのですから、泣き言など許しませんよ。私の指導が厳しいのをご承知の上で頼ってくださいだったので、全てご理解いただけますよね？」

「それでは行きます」

「うえ!?ちよ、しのみ、ヤヴウへえ!」

後日。

四宮のスパルタな指導もあり、何とかバレーの技術を仕上げきった白銀だったが……所場のチームが普通にトーナメントの最初の方で負けてしまった為、直接対決は叶わなかった。

白銀の言葉が素直に受け取り、闘争の中での友情の芽生えが目的だった四宮と藤原は己の苦行の無意味さに涙する。

一方白銀は、巧みに勝利していく己の姿を所場へと見せつける事ができた為大変満足していた。

『本日の勝敗、白銀の勝利』

自己犠牲を美しいと思えるのは犠牲を払う己だけ。

身を削るその善行が白銀にとって痛々しく見ていられるものではなかった。

後に残るのは形容し難い胸の痛み。

白銀御行は踏み込みたい

お前の何気ない言葉に俺がどれほど救われたか、お前は知らないだろう。

side 白銀御行

放課後・生徒会室。

四宮と藤原が家の用事により先に帰宅した現在。この生徒会室、……息苦しさと出処不明のドキドキが渦巻く空間は一体なんなんだ。鳴り響くタイピング音と鼓動の音が合わさり、一層の緊張感が身を襲う。

何だ、何だというんだ。いや、分かっているだろう。

十八と俺の二人きり。

所場十八と、ふ、二人きりッ……。

いや、落ち着け！俺ッ!!これまでだつて二人きりになることは幾らでもあつただろ!?

これまでの俺を思い出せ……!!

……………。

いつもこんな感じだったな。ハハツ。話す内容がとことん思いつかないぞ。十八つて何が好きなんだ?どんな話題に食いつく?

「あー。今日はいい天気だな」

「?……そうですね」

いい天気だから何?!話終わったじゃねえか!!

「十八つて趣味とか、ある?」

よし!これなら!

「特にありません」

つーづかないっ!!

「……好きなものとか、嫌いなものはあるのか?俺は天体観測が好きで、虫が少々苦手だったりするのだが」

こんな質問せめて大丈夫か?いや、友達ならこれくらい普通だ。きつとそうだ。男同士なら本来下ネタすら言い合って然るべきだ。

「……特にありません」

はい!おーわった!!

それから数十分後。終始無言で業務にあたる俺たち。

空気が死んでいる気がした。

変わらず部屋の隅でパソコンをいじる十八。いつものことだが改めて見るとその作業速度は常軌を逸しているな。正直パソコンを使つてどのように業務を進めているのか把握していないが……。

生徒会の雑務を一手に引き受け、四宮の言によれば書類の精査もそのほとんどが十八の手によるものだという。

生徒会業務のおよそ半分は十八によって担われている。

任せすぎだ。ああ、そんなこと分かっている。生徒会長、いや友として不甲斐ない。だが現状どうしようもないのだ。俺がいち一の作業を終える頃に十八はじゅう十を終える。俺の単純な能力不足故に。

負担になっていないか。

無理をしていないか。

そう問いかけても返ってくる言葉は決まって、『私がやりたくてやっていることですから』。

ああ……本当に、ままならない。

知っている。色々と家庭の事情を抱える俺を氣遣ってくれていることは。少しでも負担を減らそうとしてくれていることだって。

十八に頼られるほどの能力が俺にはない。

毎度のこと、懲りもせず己のマイナス思考に耽って。結局同じ結論に落ち着き、そして見上げるのだ。所場十八を。

「どうかしましたか？」

無意識に十八を見つめていたのか。視線に気づいた十八が小首を傾げて尋ねてきた。かわいい。……いや変な意味じゃなく。

「いや、何。所場は随分とパソコンの扱いに長けているなど前々から思っていたんだ」

誤魔化し方下手か、俺！

「……そうですね。幼少の頃から触れていますから、それなりの能力はあると自負しております。でも白銀さんも事務処理を行う程度はPCを扱えますでしょうか？」

「まあ、そうだな」

一年生時に十八が紹介してくれたバイトでそういったことを覚える機会があった。今もそれなりにこなせるし、役に立つ機会も多い。

「必要なことを必要な分だけ学ぶ。義務教育を終えた私達にはそれで十分でしょう」

「なるほど」

「過ぎたるは猶及ばざるが如し、とも言います。人の時は有限。自身は何を学ぶべきなのか。その選択をする力が子供から大人に変わる高校生には必要なものでしょうね」

「全くその通りだな」

ウエイ、ウエイウエイ!!

俺今十八と世間話できてるウウ。友との語らいできてるウウ。

まで落ちくけ。落ち着け。こんなもので満足してはダメだ。目標はまだまだ遠い。一歩ずつ確実に。けれど猛ダツシユで、十八の隣へ追いつく。

「あ、白銀さん……」

「ん、どうした?」

十八が俺を凝視している。え?何?心臓がキユつとしたのだが。何だ?どうしたんだ、十八。

「……」

無言のままこちらを見つめる十八は、パソコンを置きゆつくりと腰を上げた。

「ど、どうした所場?!何故無言で近づいてくる?」

「そのまま、そのまま動かないでください」

真剣な表情でこちらに歩み寄ってくる十八に心臓が悲鳴を上げている。

何だ!?どうなるの俺!?

右手を微かに上げ、腕を伸ばす十八。あと数歩。ほんの刹那でその手が俺に届くという時。

その時になって漸く気づいた。十八の視線が俺の左肩に向いていることに。

肩？

時が何倍にも濃縮された感覚の中、ゆつくりとゆつくりと横を向いた俺の目の先には

“御器嚙”、またの名をG。^{ゴキチ}

黒光りのヤツ、が——。

『どうもっス』

そんな声が聞こえた気がした。

「あっ」

「かりぎくぐべるぎぢうくりうにあぢイイイイイイオオオオオオオおおおお!!!!?????????」

パニックになった俺がその時何をどうしたのか、よくわからない。ただがむしやらに机を飛び越えて、目の前の十八を押し倒した。

「えっ?!何をっ、うわっ?!ちよ?!?!」

ドガっ!!!

「はっはっはっ、はあはあはあ——」

呼吸が定まらない。視界が揺れる。俺今何してるんだっけ。ダメだ苦しい。

ピトツ。

頬に伝わる冷たく柔らかな感触。

押し倒された十八が、俺を見上げながら手を伸ばしていた。

「落ち着いて、白銀御行会長。虫はもういません。また出てきても私が追い払います。だから落ち着いて。ゆっくりでいいですから、私の呼吸に合わせて」

優しい声音と綺麗な瞳に己の乱れが取り除かれてゆく。

しかし美しい、なんといいっても、どんな風にしても美しい。そうして可憐だ。男をひきつける所がある。マリアのような目顔の形。ビーナスのような目。

そんな一節が脳裏を過った。

それと同時に鮮明になる思考が現状のヤバさに警鐘を鳴らしていた。

「ツ!!すまない!!」

急いで飛び退き、勢い余って尻餅をつく。十八は乱れた服を整えながら半身を起こした。

「大丈夫です。白銀さんが虫を苦手なことは前々から存じておりました。パニックになっても致し方ないことです。それに私が上手く対処できていればこうはならなかったでしょうし。こちらこそ申し訳ありません」

「謝らないでくれ。全て俺の不甲斐なさが致す所だ。すまなかつた」
「では両者の謝罪を受け取り合つて、これにておあいこということで」

パンつと両手を合わせ頷く十八。

徹頭徹尾俺が悪いのだが、いつの間にか両成敗になっていた。意味がわからない。それにしても先ほどチラツと見えた十八の腕。頬に手を添えられた時、衣服の隙間から見えた手首から腕にかけて。柔肌が見られるはずのそこには包帯が巻かれていた。

「所場。その腕の包帯つて——」

パツと音がするほど素早く腕を背後うしろに持つていく十八。その表情には僅かばかりの焦燥が見られた。

そんな表情……初めて見たぞ。

「これは、その。怪我をしまして……」
嘘だ。

包帯の具合から推測する怪我の度合いと腕の動かし方には不自然さがある。
何を言い淀む。なぜ目を逸らす。

また何か抱えているのか。……どんなものを抱えていようと、その心まで踏み込むと俺たちは決意したんだ。

「十八ッ!!!」

ビクッ。

十八は僅かに肩を跳ねさせ、こちらに目を向けた。

「俺は……!!未だに頼りなくて。お前からしたらできないことも多い不甲斐ない会長だろう。けど俺……いや……俺たち」にとつて十八は大切な生徒会メンバーだ。お前の代わりに全てやってやるなんて今の俺じゃあ言えない。それでも支えたいと思ってる。四宮も藤原もそうだ。

全力で力になる。

だから、少しでもいいから……頼ってくれ」

1+1じゃなくていい。2にはなれなくてもいい。お前が寄りかかれるだけの支えになりたい。

隣に並び立ちたい。

十八への想いを初めて本人にぶつけた俺は言葉の最中、無意識に十八を抱きしめていた。その身体は想像よりも華奢で僅かばかり震えている。

近くで見る十八はやはり中性的で美しく、しかしその表情はどこまでも空虚で、十八の瞳には俺の姿など映っていないかった。

「……白銀さん。私は「ヴェアア?!」会長が十八さんに抱きついてる?!?!?!」

突然の大音声に生徒会室入口に目を向ける。

!!!??

「藤原ツ?!」なっ、あ、これは違ッ!!」

慌てて抱きしめていた手を解くと、十八は忙しなく帰りの身支度を整えはじめた。

「今日は帰ります。会長もいろいろと申し訳ございません。藤原さんもごめんなさい。お見苦しい所をお見せして。どうか勘違いなさらないでください。

では、お先に失礼します」

そうして足早に去っていく十八に俺は何も言えなかった。

「忘れ物を取りに来てみれば、コレ。

……会長。事情説明お願いします」

「うっ」

藤原の圧が凄い。

「十八さんにはおつかないファンクラブがついてるんですよー? 会長と十八さんの変な噂が立とうものならもう、会長……」

やめて。そこで言葉止めないで、怖い。俺何されるの？

「一体全体何がどうしてあんなつたんですかー？」

フアンクラブ。

大天使所場様を見守る会だったか。

……どうしよう非があるのはどんな角度、三六〇度ぐるっと見ても俺なんだが。

「……介錯をお願いします」

「会長オ?!?!」

一年生の頃。

高校からの外部入学である混院生と生え抜きである純院生の間には確かな隔たりがあった。

高校から降って湧いた余所者を純院生の彼らは受け入れられず、お高くとまった彼らを俺たち混院生は遠ざけた。

そんな俺たちの間に立ったのが十八だった。

混院生一人一人に声をかけて道を示してくれた。混院と純院が必然的に関われるように生徒会のボランティアへの参加を提案してくれたり、クラスの中で馴染めるように比較的偏見を持たない純院生との間を取り持つてくれた。

全てが全て上手くいっていただけじゃない。むしろ失敗の方が多かった。それでもどこまでも優しいその心に俺たちは救われ、この学園でやって行くんだという気概を与えられた。

だからこそ許せなかった。

一部の純院生。特に十八が俺たちに関わることを快く思わない連中が俺たちだけでなく十八すら貶めるような態度をとっていたことが。

そんな彼らにただただ哀しげに口をつぐむ十八を俺は忘れられない。

ここで混院生俺たちが変わらなければ、俺たちがこの学園に受け入れられるような何かを成し得なければ、手を差し伸べてくれた十八に申し訳が立たない。

そのための手段は御詠え向きのものがすぐそこまで迫っていた。

定期考査。

そこで結果を残せば俺たちへの見方も変わるだろうと思った。

俺たち混院生は文字通り一丸となり試験勉強に望んだ。誰かを想つての頑張りはこの人にも力が湧いてくるものなのだと知った。体調が狂うことも厭わず、その全能力を

試験のためだけに費やした。

結果。

学園定期考査トップ10のおよそ半数を混院生が勝ち取る快挙を成し遂げた。

そして俺は、

全科目満点。

凡ゆる天資英明の者を抑え、

No. 1 という頂に立った。

それから一度として、定期考査においてトップの座を譲り渡したことはない。

所場十八は胃が痛い

改めて考える。善行ポイント制度で一つ分かっていること。

それは、悪行に関しては見て見ぬ振りをするだけでポイントが減少するということ。ヤンキーがゴミをポイ捨てした。

スルーするとポイント減。

注意するとポイント増。

つまり相手の快、不快に関わらず悪行を正すことは何よりも優先すべき善行ということ。

知ってしまったら手を出さざるを得ないこの仕組み。

ポイントが得られるなら問題ないとは言いきれない。リスクにリターンが伴っていない。ポイント減のリスクだけじゃない。身体的リスクもだ。何故ああいう輩はすぐに出るのか。怖いよ。穏便に済ませてよ。

まあ見知らぬ子どもにいきなり注意されてイラつとするのはわかる気もする。

だからといってケツを狙ってくる漢らはもはや論外だよ。私のケツで穏便に済ませ

ようとするな。初対面でいきなりドッキングを勧めてくるって何さ。狂気か。

首を突っ込み過ぎればさらなる悪行を目にしてしまい、見逃せばより多くのポイントが減ってしまう状況に追い込まれる。

警察の方々にも何度かお世話になった。心からありがとうございます。お陰様でなんとか私の後ろは守られています。

side 主人公

変態^{エロス}は激怒した。必ず、かの邪智^四暴虐^宮の魔王^{かぐ}をどうにかせねばならぬと決意した。変態には女心がわからぬ。変態は、ただのむっつりである。

エロスを想い、アソコを弄んで暮して来た。それゆえに女心に対しては、人一倍に鈍感であった。

(……。ついに四宮が仕掛けてきやがったッ——)

少しでも早く生徒会室から遠ざかりたい。走り出したい衝動をマナー違反⇨ポイント減少という思考が鎮める。

それでも、先の生徒会室での出来事を振り返るたびに否応なく歩くペースは上がっ

た。

今日は珍しく生徒会室に白銀と二人きりだった。

これまでもないわけではなかったけど、大抵四宮あのみたりと藤原のどちらかはいた。

まあこんな日もある。

むしろこちらの方が居心地は良い。今日はずいぶん。最高にいい日だ。なんて浮かれて生徒会業務にあたっていれば、突如視線を感じた。

むっっちゃ真顔で白銀がこちらを凝視していた。凄く怖かった。

何かやらかしたかと訝しんでいると、唐突に意味のわからない問答のキャッチボールが始まった。お見合いか何かですか？ボールが空中分解してるよ。

警戒して手短に答えれば、段々と顔をしかめていく白銀。

何かがおかしい。

どこか違和感を感じるこの状況。白銀は以前からこんなにも私に話しかけてきただろうか。否だ。

二人きりの時は本当に必要なことしか話さなかったじゃないか。私が差し入れを白銀宅に持っていく等、どれほど尽くしてもそれは変わらなかった。いつも表情が硬く、私と二人でいると常時不機嫌なのになくらいに思っていた。ポイントには影響がな

かったからあまり気にしてなかったのもある。

それが変わったのはここ最近。

四宮& a m p ; 藤原と何やら企み始めてからだ。

私が見つからないでも思っていたのか。なめんな。チクショウ。

これまでは四宮だけを警戒していれば良かったのに。白銀はポイントにはプラスだし藤原だって偶の奇行を除けば積極的に私に関わってくるわけではない。藤原の“私に関わりたくない度”は顔を向けたら目を逸らされるレベルだし。私の顔面はタマ○ンかよ。

……まあ、私に変態だと見抜いているからかもしれないけどさ。

それが今はどうだ。

四宮は愉悦部員を増やしやがった。私のこと暇をつぶすための玩具にする気か。

「はっ?!?!」

そ、そそ、そういえばこの前、生徒会室を盗み聞きした時に藤原はなんと言っていた。

『次は四人でゲームがしたいです』

ゲーム。ゲームだ?!?!

ゲームってつまりは遊び。

まさかとは思うが玩具わたくしで遊びたいということか？

藤原、お前……。やつぱり邪神じゃあないかッ。

四人つて三人十石上君のことかと思つてたよクソ。私だけハブられてるとかそういうのではなかったのか。そういえば藤原にゲームに誘われたなんて話、石上君から聞いてない。

……くそッ。脳裏に浮かぶ藤原のアホっ面の笑顔が煽つてるようにしか思えない。

私は知っているんだぞ。生徒会室には四宮の管理下に置かれた監視カメラが複数台設置されていることを。

生徒会室は緊急時に生徒の寄り合い所として機能するため、常時開放されている。そうしたセキュリティの観点から設置されたそのカメラ達は副会長の四宮が管理していた。

先程の生徒会室でのあれこれも四宮と藤原でモニタリングしていたのだろうさ。白银が凝視してきた段階で何となく察しがついていたよ。藤原も随分とタイミングよく登場したし、そのおかげで男に抱きつかれているという特級のホモネタまで目撃者ありの確定事項になってしまったし。

カメラで記録しているのにわざわざ藤原が姿を見せたのはきつと、常にお前を見ているぞ”というチラ見せレベルの脅しも含まれているのかもしれない。

お前ら、変態には何やってもいいと思つてる？

頼むから大人になってくれ。貴方らもう高校生だよ？私に構ってないでアオハルしてこいよ。大人の階段登ってこいよ。頼むよ。

「……本当にこれからどうしようか」

今日の事のおかげで私が一つ思い違いをしていたことがわかった。四宮たち三人は同列の存在ではなかった。四宮にとつては白銀すらも玩具に過ぎなかった。

白銀が本気で気絶するほどに大嫌いな虫ゴキリを使って仕掛けてきた時に確信した。突然白銀の肩にゴキが現れた時は我が目を疑った。四宮はそうまでして私を擲擧シナリオいたのか。私の痴態が見たいのか、と。

一体どうやって白銀の肩にゴキを配置したんだ。会社の廊下ですれ違った社長の鬢ズラがずれてる時並みの対処のむずさだよ、そんな状況そうそうないわ。結果失敗したし。

私はてつきり白銀と四宮は両想いだと思っていた。恋人までは行かないまでも、お互い意識し合っていると思っていたんだ……。

一年生の頃。白銀が生徒会長になる前から仲よさそうにしているのを見てきた。つい数日前も突然見つめ合ったりしてたし。

……もうなんだろう、白銀が哀れで仕方がない。同性としてあまりにも不憫だ。

四宮が考えたであろう私に対する擲擧シナリオいを健気に全うして、気を引こうとしているそ

の姿が。

明日からはより一層白銀に優しくできるよ。

……うつ、……ふう（決意の音）、決めた。

ついに来たんだ。四宮と決別する時が。こちらに直接仕掛けてきて、さらには弱みまで握られた現状だ。

あげく白銀に腕の包帯を見られ中二病疑惑まで浮上したかもしれない。

あの時の白銀の顔は痛々しい者を見るそれで……。違うんだと叫びたかった。それでも、おそらくは台本通りに私をホモに仕立て上げるために抱きついてきた時は思わず震えたよ。抱きつく流れあった？

あげく頼ってくれたの。自分は不甲斐ないだの。私より断然優秀な頭脳を持っていて定期考査トップ様が何いってんだい。上から目線で勉強を教えてあげるとドヤつたら混院生全員に敗北した私を遠回しにこき下ろすな。

一聴で四宮が考えたであろうセリフだとわかったよ。的確に私の心を抉るの得意ですよね四宮さん。

四宮は私の痴態これくしょんでもしてるの？痴これなの？今回の痴態はSレアかな、瑞鳳かな？泣くよ？……それも痴態か。

まあ、白銀はいいよ。男の純情を四宮に弄ばれてるだけだしさ。

問題は四宮と藤原だよ。

なんなの君たち。暇なのかな？暇を持て余した神々の遊びなのかな？私を揶揄うのに本気出し過ぎじゃないですか。

はっ。そりや暇でしょうよ。私とは頭の出来がちやいますからね。人生にゆとり溢れちやつてるでしょうよ。定期考査ワンツターの白銀と四宮に、普段はアレだが語学堪能の藤原。頭の出来はむしろ良い方だろう。音楽の才も特級クラスだ。

誰もが一つも二つも飛び抜けた何かを持っていやがる。私が一番抜けてるのなんて女子のチラ見技術だけやぞ。どんな才能だよ。変態の才能だよ。ちくしょう。

中等部の頃にガチのマジで本気で定期考査に臨んでギツリギリ50位だった精神年齢大人（笑）の私。以降、どんなに頑張っても50位より上に行けない私。

天才児たちの集い、パネーツス。

絶対に49位になれない私の学力の限界。変態は現実の厳しさを学びました。前世の優秀さが如何に井の中の蛙かわかりました、はい。

……そもそもこんな状況になったのは私の不徳だ。

年齢的に子供だからと四宮たちを侮っていたからこうなった。見るべきは積み重ねた歳月でも経験でもない。何を学び得てきたかだ。

数多くの経験をして、何年生きようとも、学びを得て自ら考えられなければ意味が

ない。それが出来ない奴は愚か者だ。じつちゃんがそうだった。おいおいじつちゃん、それは私のことかい。

年齢も経験もその一個人を推し量る一材料でしかない。

それこそ、この学園なんて普通の学生が経験しないような環境に身を置いて、そこから学び得る思慮深さのある人達ばかりだ。

そう人だ。本来の私たちに子供も大人もないんじゃないか。うん。

彼らと私は対等。いやむしろ私は劣等。

そうだ。やってやる。私はやるぞ。

明日、明後日……いや来週、そう絶対に来週、四宮へ頭を下げた許しを乞う。

そこに大人と子供なんて認識は存在しない。子供に本気で頭を下げる中身の年の差が三倍近い大人はいない。

そこにいるのは人と人。

だから土下座や靴舐めをしても大人としてのプライドは傷つかない。

全てはポイントのため。

さらば大人の私。ばいばい。



都内アパート。

四方をアルミ柵が囲い、所狭しとファイルが並べられている2LDKの一室。

ファイルのラベルにはそれぞれ個人の氏名と秀知院学園高等部、学年、クラスの文字。一人につき一ファイル。生徒のパーソナルデータが纏められている。私が学園生活を送る上で、必然的に関わる人が多い高等部のみをPCのデータから取り出したもの。

プラスαで白銀のご家族など、関わる頻度が多い人物に関してもファイルとして書き出した。

無論そこには生徒のスリーサイズが綴られている。四宮はもちろん藤原と白銀も。

これが四宮たちに見つかったら私はどうなってしまうのか。いや、でも四宮たちに関してはすでにむつつり変態野郎ってバレてるわけだよ。手遅れか。

でも変態は変態でもムツツリだからね。変態目・むつつり科・ムツツリ属・学名「剥突理」ってだけだから。

むつつりはYES興奮NOタッチがルール。

今生の私が何年、女性に触れていないことか。異性に触れる。それだけで不快判定に

及んでポイント減になる可能性がある以上、ドチャクソに気を使ってるから。

「……書き終わった」

今日判明した四宮と藤原、白銀の新情報を各ファイルのパーソナルデータに書き足した。

・四宮かぐやは男のウブな心を弄ぶ鬼畜。学園を裏から牛耳る女帝。変態には容赦がない等。

・藤原千花は四宮に付き従っていると見せかけて己の愉悦だけにしか興味がない悦楽志向人間。何考えてるのかわからない。変態には容赦がない等。

・白銀御行は四宮と藤原に心を歪められた純情な男。四宮の操り人形。可哀相なお人。本当はいい奴、きつと等。

……あれ？でも、そういうえば白銀つて出会った当初から私に冷たかったような。それにあの二人とは初対面から何だかんだ結構楽しそうに話していなかったっけ。

いや、よそう。

……もうやだ。助けてくれ石上君。

私、何も悪いことしてないよね、石上君。

↓中等部の頃、四宮に付き纏っていた。

↓いやらしい目で女生徒を窃視。

↓生徒の個人情報を集。

↓変態。

↓所詮は学園の雑用止まりの人生。

↓四宮たちに嫌われるのは単純に生理的な気持ち悪さが原因かもしれない受け止めきれない現実。

おいおい、因果応報じゃねーか。あはは。

ピンポーン

ファイルを棚に戻そうと立ち上がりかけたところで部屋に鳴り響くインターホンの呼び出し音。

「……………え？」

誰？